
苦い味、甘いもの

二天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

苦い味、甘いもの

【Nコード】

N3501K

【作者名】

二天

【あらすじ】

中学校のとき、すごく仲の良かった友達、咲。
6年経ったある日、久しぶりにであった咲は6年前と変わっていなかった。

久しぶりに出会った咲と俊の1日だけの物語

「ねえ、そっちは楽しいかい？」

彼女の声の懐かしさに僕の心臓は正直だった。

彼女と会うのはもう何年ぶりだろうか、いくらか大きくなった背と若干低くなった彼女の声が時を物語っている。

地区の夏祭り。今まさに僕はそこにいて、彼女とあった。

夏祭りは決して大きいものではなく、人もこの地区の人しか来ないため、ほとんどの顔は知っている。

その知り尽くした顔の中から突然、彼女が出てきたのがさっきの話である。

彼女は背と声以外は全く変わっていないかった。

すぐに笑みを浮かべるところ、きらきらと輝く瞳、どこか強がりなところ……

全く変わっていないかった。

「久しぶりだね、元気だった？」

さっきの彼女の質問には答えずに、僕はいった。

彼女はやっぱり笑みを浮かべていた。

ちょうど頭の上にちようちゃんが幾十と並んでいて、真っ暗な空に柔らかに温かい光を灯している。

また、その柔らかに温かい光は彼女にも降り注ぎ、一層美しく彼女を彩ってもいた。

「ふふっ、あたしは元気だったよ。俊はしゅんどう？」

「僕だって元気だったさ」

ああ、そうか。自分は俊という名前だったんだ。彼女に俊と呼ばれたとき、ふとそう思った。が、これはおかしい事である。別に名前を忘れたわけでもないのに……。ならばどうして。別にそこまで考える気はないので放っておいた。彼女は相変わらず、思わずこっちまで浮かべたくなるような笑みをしている。

「そう、それは良かった。なんたって俊が中学のときは……」

そこまで言って彼女は口をとじた。しかし続けて、こんどは別のことを言った。

「ねえ、どこか静かなところへ行かない？どうもうるさくって疲れちゃうわ……。散歩でもしましょうよ」

言われてみれば、周りは大きな太鼓の音やら、大きなスピーカーから流れる祭りの歌やら、人の叫び声やらでうるさかった。

今までなぜ気づかなかったのかと思うと、それは彼女に見とれていたからであらう……。

結局、僕達は出る事にしたのだが、意外にも人の数が多かったため、会場を出るのに苦労した。

会場を出れば景色は田んぼ一色だ。

夜だったが月が明るく、田んぼを青く照らしている。

僕らは田んぼと田んぼの間にある、横に2人歩ける位の狭い砂利道を歩いた。

「やっぱ静かなところが一番落ち着くわ、あたし田舎者だから」

「それを言ったら僕だって田舎者さ……」

そういつて、二人は笑い合った。彼女の声は高く、僕の声は低い。そのお互いの声が空気中で混じりあい反発しあつて、まるで別の声のようになっていく。

「ほんつとに、久しぶりね」

彼女がいった、笑いながらである。

月の光で若干青く見える彼女の顔は、やっぱり美しい。

「本当だよ、咲さんと話すの、何年ぶりだろうね」

「人に名前と呼ばれたのも久しぶりだわ」

「そうなの？」

「うん、いつも苗字だからね」

僕は顔が熱くなるを感じた。

彼女の名前は咲だったが、別に呼び捨てしあうような仲ではなかったから、咲さんと読んだのであるが、思えば咲さんと別れた日から会った今日まで、女の人を名前で呼んだことはなかった。

「中学卒業して以来だから……6年ぶりかな？」

「もうそんなに経ったんだ……」

「あたし達、年取ったわね」

そついつてまた2人は笑い合う。

足元には砂利を蹴る音、後ろには幾らか小さくなった祭りの音楽、横と前方には微風で緑がゆさゆさと揺れる音。

咲と俊はそんな音の中に包まれていた。

咲と俊は中学の時の友達だった。

3年間クラスも同じで、部活動も同じ部に所属していた。

そのせいか2人はよく話し、テスト期間には教室に居残り、徹底して勉強しあうことも多かった。

当然ながら「あいつら、付き合ってたんじゃない」なんて噂もあったのだが、実際そのような事はない。

ただ1度、咲は俊に尋ねたことがあった。

「ねえ、俊は好きな人、いるの？」

そう尋ねたときの咲の顔はあまり覚えていない。

「別に………居ないよ」

「そつ、なあんだ」

咲はどうしてそのような事を俊に聞いたのかはやっぱり分からないし、聞かれた俊もあまり気にしなかったから、その会話はそれで尽きたのだった。

そして、時は流れて卒業後、咲はどこか遠い高校へ行き、俊は地元

の高校へ入学した。

咲と俊はそれきり、夏祭りである今日まで、一度も会う事はなかったのである。

久しぶりに出会った彼女を見て、僕はどれだけ嬉しい気分にいるか、彼女はわかるだろうか？

今、隣に彼女と一緒に歩いていて、どんなに嬉しいか、咲さんにはわかるだろうか？

咲さんは今どんな気分なのか、僕にはわからない……………

「うわっ！！」

彼女が突然叫んだのに僕は驚いた。

「な！？どうした！？」

「ごめん……………石につまずいちゃって、びっくりしちゃった」

幸いにも彼女は転ばなかった。

彼女はまた笑った。

「あたし、ドジねえ……………」

「ほんとだよ、ドジだなあ咲さんは」

「そろそろ帰りましょう、もうお祭り、終わったみたいだから」

そろそろ帰りましょう。彼女のその声を聞いたとき、正直に寂しく思った。

もう少し話していたい、もう少し一緒にいたい……
そう思ったが口には出さずに素直に後ろへ振り返った。無言である。

後ろを振り向くと、オレンジ色の光が、先に見える。あれはちょうどちんだとすぐに気づいた。

「綺麗な星空ね……」

彼女がそう呟き、僕も上を見ると白い粒粒が、真っ暗な暗黒の中に散りばめられている。

真っ黒な暗黒、それはこの先彼女と会う事があるかと言う考えをも黒く染めていくように思えた。

白い粒粒……星は何にたとえようと考えてみれば、空にある星が、純粹に、綺麗に輝いて見えるだけである。

「ねえ、咲さんは好きな人、いるの？」

祭りの会場へ向かう途中、ふと僕は彼女に聞いた。

彼女はこちらへ顔を向けることなく、空へ顔を向け続けている。ただ、青く彼女を照らした月が、彼女の目が大きくなったのを逃さず写した。

彼女は僕の質問には答えなかった。

2人は祭りの会場へと向かってゆく。

会場は静かだった。おそらく皆帰ってしまったのだろう。
しかし、ちようちんの光は輝いていてた。

砂利道を抜けるとき、彼女はちようちんの光をぼんやりと眺めながら、呟いた。

「もう、会えないのかな……」

それは独り言であるか、僕に言ったのかは分からない。
彼女は続けていった。

「ああ、わたあめが食べたいわ、なんだかかなしくなっちゃった……」

このときもやっぱり、僕の心臓は正直だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3501k/>

苦い味、甘いもの

2011年1月27日00時48分発行